

22. <Only One ということ>

私のような年寄りにとって、年末恒例の紅白歌合戦といえば、三波春夫や美空ひばり、はたまた都はるみ、せいぜい五木ひろしといった面々がトリを取るものである、といった固定観念があるのですが、昨年末の大トリはSMAPでありました。彼らが歌った「世界に一つだけの花」はCD売上がダントツであったそうで、紅白効果もあってか新年早々のオリコンチャートでは第1位に返り咲いています。作詞の槇原敬之さんはこの歌で、我々ひとり一人が世界中で一つとして同じものがないきれいな花、即ちOnly One なのだから、No.1 になれなくてもいいと主張しています。しばらく前から、経営論の世界でも、ある業種で No.1 企業を目指すよりも、他の追従を許さない Only One の製品やサービスを提供するビジネスモデルを構築すべきだと言われてきました。企業の勝ち組と負け組がはっきりし個人生活にまで影響を及ぼしてきた世相が、この歌をヒットさせたのでしょう。

SMAPが紅白のトリを取る。No.1 になれなくても Only One であれ。これを評論家的に言うと「パラダイムの転換」ということになるのでしょうか。これは米国の科学史家トーマス・クーンが、著書「科学革命の構造」の中で提示した概念だそうです。パラダイムとは、ある時代が共有する思考の枠組みを意味する言葉で、これが固定化してしまうと科学が行きづまるため、その転換が求められるということのようですが、その後様々な分野でパラダイムの転換＝固定観念からの脱却が言われています。

昨年11月に、JSが民間企業との共同研究で開発した膜分離活性汚泥法と下水汚泥炭化システムについて、技術評価委員会から技術評価の答申をいただきました（評価書はJSホームページでご覧いただけます）。膜分離活性汚泥法は在来型の活性汚泥法に比べ様々な利点を持っていますが、これは活性汚泥と処理水の固液分離機構に、従来定番とされてきた沈殿池に代えて、精密ろ過膜を用いることによってもたらされたものです。また、下水汚泥炭化システムは汚泥から炭を作るものですが、汚泥を最終的に廃棄物として処分するのであれば完全燃焼させて焼却灰とする方が有利です

から、これは汚泥の有効利用を前提とした汚泥処理方式であると言えます。従来の汚泥処理方式が処分を前提として、処分量の削減や取扱い性の改善を目的としてきたこととは一線を画すものです。

この両者とも他の分野で使われていた技術に改良を加えたものですが、従来の下水道技術の枠組みを超えた発想に基づき、他に先駆けて新しい下水道技術を開発したものと言えるでしょう。このような、JSならではの Only One 技術の開発を今年も推進して参りますので、ご期待いただきますとともに、皆様のご支援をお願いいたします。

< 大嶋 篤 >

※No. 25 号(2004/1/19)に掲載